

十九世紀後半、鉄道や電信といった交通・通信手段の発達にともない、欧米のジャーナリズムでは遠隔地に派遣された記者が現地からニュースを伝えるようになった。こうした特派員は英語圏では「リポーター」(reporter)と呼ばれ、やがてフランスでもその名称で呼ばれるようになった(英語形の「ルポルテール」(reporter)とそこから派生したフランス語形の「ルポルトゥール」(reporteur)があるが、前者の方が広く用いられる⁽¹⁾)。やがて国内外の大事件を追いかける特派員は、ある種の敬意をこめて「偉大な^{グランド}」という形容詞とともに「グラン・リポーター」と呼ばれるようになった。それに対して身近な三面記事を追いかける記者は、「卑小な^{プチ}」という形容詞とともに「プチ・リポーター」と呼ばれた(フランス語の発音は「グラン・ルポルテール」「プチ・ルポルテール」だが本書ではこのように表記する)。また、リポーターが書く記事は「ルポルタージュ」(reportage)と呼ばれるが、こちらもグラン・リポーターによる「グラン・ルポルタージュ」とプチ・リポーターによる「プチ・ルポルタージュ」に大別された。リポーターは従来のジャーナリストに比べて、現場に駆けつけ自ら取材する機敏な行動力と見たままを伝える正確な観察力を身上としていた。

ガストン・ルルーの推理小説『黄色い部屋の謎』（一九〇八）には、ジョゼフ・ルールタビーユという若きリポーターが探偵役として登場する。彼は卓越した推理力で解決不能と思われた密室の謎を解き明かし、事件の犯人を暴きだすのだが、そのさいにわざと犯人に逃亡の余地を与える。物語の末尾において法廷で判事や検事や傍聴人を前にして事件の真相を語るとき、彼は自らの行動について次のように弁明する。

「ぼくは司法の人間でも、警察の人間でもありません。ただのジャーナリストです。ぼくの仕事は誰かを逮捕させることじゃない。自分なりのやり方で真実に奉仕すること、それがぼくの務めです。あなたがたは自分たちのやり方で社会を守ればいい。それがあなたがたの務めなのだから……。でも、人を死刑台に送るのはぼくの役目じゃありません」⁽²⁾

この作品においてリポーターは警察や司法とは一定の距離を置きながら、独自の捜査によって犯人を突き止める。つまり彼は警察や司法と同様に社会正義に貢献するのだが、あくまで公権力とは独立した存在としてであり、いわばその過ちをただす役割を果たしている。ここには、立法・行政・司法から独立しつつ権力の監視者としての役割を担う「第四の権力」としてのジャーナリズムの役割が暗示されている。

二十世紀初頭、リポーターは冒険小説においてしばしばヒーローとしての役割を演じるようになった。⁽³⁾すでにジュール・ヴェルヌ『皇帝の密使ミハイル・ストロゴフ』（一八七六）には、ハリー・ブ

ラントとアルシッド・ジョリヴェという英仏二人の特派員が登場していた。モリス・ルブラン『奇岩城』（二九〇九）では、少年リポーターのイジドル・ポートルレが活躍する。ピエール・スーヴエストルとマルセル・アランによる『フアントマ』シリーズ（一九一一）のジェローム・フアントールも、悪に立ち向かうためにリポーターになることを決意する。エルジェのバンドデシネ『タンタンの冒険』シリーズ（一九三〇）の主人公タンタンもまた、世界を駆けめぐる少年リポーターという設定である。これらの作品において、リポーターは事件の目撃者であるだけでなく、事件に介入しその解決に尽力する当事者でもある。

そもそも著者のルルー自身が、人気作家になる以前は『ル・マタン』紙の記者であり、世界各地からニュースを伝えるグラン・リポーターだった。さらに、『黄色い部屋の謎』は単行本として刊行されるに先立ち、挿絵入り新聞『イリュストラシオン』紙に連載された。ここには、リポーターである作家がリポーターを主人公とする小説を執筆して新聞に連載するという、いささか複雑な構図が見てとれる。そこにフィクションと現実のひそかな共謀を認めることもできるだろう。つまり、作家がリポーターを正義のヒーローとして描くことは、リポーターの仕事の社会的意義を暗黙のうちに称揚し、ひいては作品が掲載される新聞自体のイメージアップに貢献することになるのだ。

ところで、このようなリポーターの多義的な性格は、冒険小説にかぎらず一般のルポルタージュ記事においても認められる。そこではリポーターは事件の目撃者であると同時に、それを記述する作家であり、記事を通して事件の解決に尽力する当事者でもある。リポーターはこのような重層的な役割を利用して、困難に立ち向かい真実を追究するヒーローとしてのイメージを自ら築き上げていった。

とりわけ一九二〇年代に特定の主題を掘り下げた調査ルポルタージュが台頭すると、グラン・ルポルタージュはジャーナリズムの花形ジャンルとしての地位を確立し、グラン・リポーターはジャーナリストのスター的存在になってゆく。

*

アルベール・ロンドル（一八八四—一九三二）はこのようなルポルタージュ台頭の時代を生きたジャーナリストである。最初は政治記者としてキャリアを積んだのち、第一次大戦時には戦争特派員としてヨーロッパやバルカンの戦場におもむき、最前線の兵士や銃後の市民の姿を取材した。戦後には国際リポーターとして世界を駆けめぐり、各国の戦後処理の進展や民族運動の興隆を伝えた。一九二三年以降は社会問題に鋭く切り込む調査ルポルタージュを次々と刊行した。『徒刑場にて』（一九二三）ではフランス領ギアナの徒刑場の苛酷な環境を、『ピリビ ダンテは何も見えていなかった』（一九二四）では北アフリカのフランス軍刑務所の非人間性を、『狂人のもと』（一九二五）では精神病院の入院患者の悲惨な境遇を、『ブエノスアイレスへの道』（一九二七）では南米における白人婦女売買の実態を、『黒檀の大地』（一九二九）ではフランス領ブラツクアフリカにおける黒人労働の現状を、『さまよえるユダヤ人は行きついた』（一九三〇）では東欧や中東におけるユダヤ人の苦境を明るみに出した。これらのルポルタージュは大きな反響を呼び、しばしば世論を動かして関係当局に改革をうながすにいたった。こうしてロンドルは社会の不正と闘うヒーローとしてのリポーターを自ら体

現した。一九三二年の突然の死によってその活動は断たれたが、彼の名は新人ジャーナリストの登竜門「アルベール・ロンドル賞」に残っている。

ロンドルは今日フランスにおいては、ルポルタージュというジャンルを確立し、社会正義のために闘った偉大なジャーナリストとして認知されている。しかし日本において彼の名はまだ十分に知られていないと言いがたい。本書では、この知られざるジャーナリストの生涯と業績を紹介し、彼がジャーナリズム史において果たした役割を解説する。そのために、ロンドルの生涯を伝記的にたどりながら、それぞれの時期の代表的な仕事を取り上げて検討する。そのさい、彼が扱った主題の歴史的背景や、彼が行った批判の有効射程についても検証する。さらに彼のルポルタージュの叙述スタイルを分析し、とりわけそこに現れたリポーター像に注目することで、彼が闘うヒーローとしての役割をどのように演じたのかを明らかにしたい。